

雑

## 雨の幼稚園

錄

愛らしい遊びのかずく

るりと後ろを向いてもと来た方へ進むといふのであつた。是は餘程注意力の強い子でないとうつかりしてゐるでせう」と記者がいふと先生は「大人には一寸さう思はれますが子供はかういふ遊戲中にも變化のあることを喜びまし手の鳴るのを待つて居ります」と語つた、何にしても愛らしいものである。

打ち續く五月雨の鬱陶しさにさらでも活動性の溢るいばかりな幼児は大好の砂遊びも出来ず如何にして其日な暮す事であらう、昨日蕭々と降る細雨の中を江戸堀幼稚園に行つて見た、折しも遊戲室では五つ六つの幼児が男女打ち交つて盲目遊びの真最中、先づ

三十人ばかりの幼児が大きな輪を作つた中に愛らしいエプロン掛けたおみよちゃんが紺ガスリの太郎さんとが目をかたく縛られて頬りに追つかげたり逃げたりしてゐる、おみよちゃんが「鬼さん」と手をなでつけば太郎さんは其聲なるべく追つかげる、併し互ひに手をなでれても捕つかつたりするので輪になつてゐる見物人はをかしいーと手をたいて笑ふ其嬌はしさ無邪氣身體へやうがない、遂におみよちゃんが捕まつたので又ドツと笑つた、それが済むと今度は其まゝ鬼だけ變つて「茶坊主」をした茶坊主は輪の中に子供が矢張目を縛られて居るがお盆に茶碗を載せたのを持つて自分の思ひ勝次さん、近藤さんなど名を指して置く、指された子が今度は鬼になるといふのであるが目無しないでお盆の茶碗を落すまいと注意する、手つき足つきの危なつかしさ、折角指して行つた名が進つたりするので紅葉のやうな手をたいて皆ながら笑ふ、幼稚園に居ると雨のいぶせきな思ふ處ではなく先生方も見て居る記者でも眞實に心から笑つて仕舞ふやがて此頃同園で新しく作つた「拍子行進」といふのをしながら各自教室に入つたが此拍子行進といふのはオルガンのマーチの曲に合せて手を振り足踏た「しく幼兒の行進中筋に立つて居る先生が一つ手をたいくと子供は一時にく

## 双葉幼稚園の午後

毎日一錢宛持つて来る  
先生帶を締めて頂戴

○双葉幼稚園の現況　四谷駒ヶ橋の双葉幼稚園は去る明治三十九年學習院女學部附屬幼稚園主任野口幽香子女史が同地附近に在る貧民の子女を教育する趣旨にて西湖の義捐と同情者の盡力とを得出創立したるものにして爾来星宿を経ること五年目下は定員百二十名を超ゆること十名即ち百三十名の子女(内男兒七十餘名、女兒五十餘名)を五組に分ちて教育し居れるが總て世間何れの幼稚園にもその授業時間は午前より午後一二時に亘る僅か二三時間に過ぎざるが常なれど元來此園は其日の生計に迫はれて餘事を圖るの暇なき人の子に一分一秒にても多く真き感化を與へんとする目的して起りたるものなれば午前は八時より午後は五時まで殆ど終日兒女の師となり母となり或は遊び相手となり居る隣母の勞の大なること此一事のみにても並大抵の事ならずして特志の者ならでは到底出來得べからざる處なり況んや家庭の教へ全く無く生ふるが儘に任せたりし若草を直すに導かんする困難は一通りの事にはあらざるべし園長野口女史は一週一二回米園して全般の事務を總覽し種々の注意を與へゝあるが平生は渡邊千子百島増子代子鈴木とく子鈴木ゆき子近藤み子多々貢いで子の六女史専ら之に從事し内、百島鈴木鶴永の三女史は此處に住居して總ての監督

にも住じ居れり

○門を閉づ。記者は一日午後に於ける園児の授業を見んと欲し此園を訪ひたるに門は堅く閉ざされて出入自在ならざれど垣の内に園児の嬢々として戯るありて不圖見れば上より引金の札は下れり試みに二つ三つ強く引けばキヤラコ紗良砂の授業衣を纏へる鈴木女史は走せ出で、手づから門の鍵を外し「此邊には不良少年が居りまして一寸も門を開けて置かれませんのでござります」と言ひつゝ一室の内に導かれる未だ此園に就て何等の見聞もなきるに早くも此不安の語を聞き其の經營の至難なるべきを想到せり。

午後の園児。此園にては日々園児に義務として一課を持ち來たらしめ其一半を吟蓄して卒業の時に與へ、其一半を以て日々の葉子料に當て午後より三時間の間に菓子を與ふる規定は策ねて聞きたる頃なりしかば園児か一日中唯一の樂みとする休憩時は既に過ぎて運動場の彼方此方に三三の園児一團となり木を積むあり土を運びて庭を造るあり競争を爲すありさては粘土を手にして手工に餘念なきあり裏手なる廣き空地の青草燃ゆる中には、草を摘みつゝ打連れて唱歌唄ふあり、運動場の所々には色々なる鉢植の花、時知り頗り匂ふも床と鈴木女史曰ふ、園長が非常に花を愛しますので、毎日各組の生徒に水を遣つたり日光に當てさせたりなどして、培養に努めさせ先づ之に因て幾分か心の沈着くやうに致して居りますが決して之を撫るやうなことは致しませぬ。

▲先生帶を締めて折しも摘みたる草を隻手に握り今はや用なき薄老茶毛糸の襟巻を帶にしたる少女、しどけなく解けたる花辺の前掛と共に引摺りながら駆け来り鈴木女史の胸に停歩して宛ながら母に甘へるやう「先生帶締めて……」と腮面もなく差し出されたる布片を指し、これは手拭ですが無論始めは斬なもののは持つては参らないのですが此方から一人毎に與へて必ず腰に下げ

て来るやうに串渡して置きますが、今日持つて歸ると、明日は形なしに無くして仕舞うと云ふ有様で殆ど毎日漸らしいのを遣らなければならぬやうな始末でしたが母の會毎月十五日同園にて開くの度に異れども誠して遣りましたので、近頃はこんなに汚なくなつても必ず附けて來るので御座いますと云ふ

▲粘土細工の意匠。彼等が身巾合はざる衣の而も垢にまみれたる身に纏ひながら物足らぬ己が境遇の果なさをも思はずして日々此園に通ひ良き教へを聞き面白き遊びに打興じ今日の日は正しき道に運び得るは偏に世の特志家の厚き情に外ならざるは今更言ふまでなけれどもさるにても周圍より彼等に及ぼす惡化の多大な免かれんとするも亦能はざる處なるべし鈴木女史の談に依れば此園に通ひ来る女児は考案手工作に男児に比すれば概して拙劣なりと云ふ考案は兎に角、手工の如きは世間一般の上より云へば寧ろ女子に最も適せるものとし又隨分巧みに其技能を發揮し居るものなるに、この下層社會に於ける女児が、男児に比して著しく其技の拙なりと云ふは、如何なる原因の存するにや教育者の一考に資すべきものなり。折から二三の男児打寄りて粘土の細工に餘念なきを何を造るにかと進み寄りて熟観すれば鈴木女史は傍らより「あれは御神奥様でござります此近所に諏訪神社の御祠がございまして毎年二つの御神奥が見さ出されます、一つは御家根に鳳凰一つは寶珠が附いて居りますので、此處の子供は、粘土の細工とさへ云へば御神奥を造るのでござります」

▲先生の手は常に造るものは動物の形でござりますと成程小さい土だらけの手は今や鳳凰を家の棟に据えんとして苦心せる處なりき。

▲先生を包圍す。折から授業の鈴は鳴り、この時間を終れば彼等は已がじい其住家に歸るなり前記の青草原に隣接に引率せられ樂しげに散歩せざる子等を超越して打跡めつゝ教室に至りて見れば一組は折もの一組は針の大通し一組は石版画なり隣母は何れも同じ授業衣を纏ひて教示せる様いと親切なり「これ何うするんだ」先

生これで宜いのしこかしこより聲起りて忽ち先生を包圍せる子等は身體も衣服も垢に汚れて異様の臭氣臭を衝く、之を一々懸るに世話をする先生の苦勞は察するに餘りあり世の絶羅に身を包める人々はせめてその餘財を抛つて斯る事業に盡力せる人の特志を扶くるこそその本分なるべけれなど思ふ

▲入浴と辨當。最初周囲は朝六時より開門したるも室内的器物往々紛失することあるより已むなく七時よりとし。それにてもなほ醫戒に困難なるより近頃は入時開門と云ふことに改めたるなりとか、而して入園申込みは非常に澤山なるも経費の都合にて前號記載の員數に止め置くなりと云ふ又毎週二回園児の母親三人を雇ひ入れて子女を入浴せしめ居りしも昨今は之れ又毎土曜日に改めたるにとこれに付き鈴木女史は語るやう「貧民窟として不思議なことは入浴を度々することです、それ故折角湯を立てゝ入浴させて遣らうと待ち構へて居ります」と宅の子供に昨日入れましたから、何うか今日は御免を蒙りましたなど申すものが多いので一週に一度と云ふことにしたのでござります、それからお辨當の副食が毎日變つて居りますこれも貧民には不似合ですが、一體歎ケ嬢と申す處は一旦此處まで身を落さば大へんに何か「御座くて暮し好い處ださうで、從て食料などは私共が考へて居るやうなものではないのであらうと思ひます。昨日ですと園長も見えて居りましたから、何か御話も申上げられたでせうが、私は至つて不行届で只年役に斯うして御接申上げて居るのみのことですから折角の御尋ねに有益な御話も出来ませぬ併しどうか御目に餘る處は充分に御批評を願ひます」云々。談は盡されどさの多く長くはと今年卒業したる園児の製作せる粘土細工一つを借り受けて醉し去らんとされは、小さき子供等は、先生左様なら、左様ならと莞爾しつゝ衣の袂を引きなどして(完)

### 大坂西六幼稚園の尚武祭

幼兒の運びに何がなとの工夫怠りなき西區の西六幼稚園では舊暦重五の前日に當る昨日十日の午前中を以て菖蒲の節句遊びを催した。ヤ一御節句じや、嬉しく嬉しい」と特に許された御菓子袋を腰にアラ提げ端午の唱歌を歌ひながら「母さんも、父さんも」と無理無體に急かし立てて例より早く幼稚園へ來て見る。と玄關の應接間には鎧武者の額が掛つて柱には菖蒲の活花、何の保育室しきの保育室も塗板牆には白葉の菖蒲ばかり、廣間に並べた「作り歎」と櫻庭やら兎やら武者模やらの類を撰んだ先生の心配りに幼兒はいよいよ大喜び、お庭の先の休養室に美しう飾り立てた騎馬人形や鎧武者や熊を押へた金時や加藤の蛇の目の旗さしの御殿作りの武者人形から當世ぶりの軍人など新古數十の人形櫻をグルリと園んで押合轡合の品さだめに時を移してから大遊戯室の裏敷へ二百餘のお腹を並べたの九時十分過であつた。紫の引幕かスルスルと開いて君が代の歌が渾んで愛らしい源平行進が平舞臺を下りて仕舞ふと次が「舌切雀」の可憐らしい獨唱。幕が閉つて幕が開くと顔を包んだ熊の上に斧を擔いだ金太郎の活人蔵が笑ふて居る。山田さん、こつち橋本さんと雨だまりの力士を呼び出すと鑑で杯の兩力士が力みかへつてシコ踏んで直ぐに組みついて一生懸命に秘術を盡す「モシ」「行司さん、モソト土俵を回つて掛け声かけなはれ。アイヤ、残つた」「ソーラ着いて立つて居ては勝負が見えまへんぞ、ハ……」と使丁の爺さん行司の後から走りまばる「オシト、あつた」「東勝イ、ソーレ軍配を上げなさるんかな、オーハー、ソーチヤー」と勝負は二番三番四番、とうとう東方へ御勢が渡りて大相撲が打出しになると中入で「御菓子おあ

かり」といふ御許がある。そのうちに夢が聞くと寫眞のやうな「虎退治」の活人節、彈き出す風琴の音につれて「今日は五月の御番句で、家様には高い鰐のぼり、うちには飾る武者人形、鎧兜に鎗もつて、加藤清正虎退治」と満場齊に歎び出した時の勇ましさ可いらしさ、御仕舞ひの綱引には人形のやうな巴御前や板額どのも打ちまちつての大働きに後の席の父さん母さん姫さん達も歎かれて拍手喝采、手に／＼棒と柏餅を賣ふて尙武祭の終たのは十二時前であつた。

### ●愛らしい陳列

安土町の船場幼稚園では昨日新築の保育室に児童の作品を陳べて父兄達の縦観に供した、遊戯場は小砂利を敷きつめて芝山の陰に大きな金網の小鳥籠がある、芝山も児童が轉んだり上つたり出来るやうになつて、新らしい藤の棚の下の歌謡は大繁昌、成るべく山も樂に上れる機にして風ふまいに運動させないのが目的でござります」と八田保姆は云ふ、折紙の電車があつて恩物で梅田スキンション、築港、天王寺大阪城が作らへてある、築港行き、四・橋乗り換、折と子供が云つて喜んでゐる、こゝに汽車、人力車、電車、何れが早いかに就ての児童の答へが出てゐる、電車は車が澤山あるから、電車は車に油をつけるから、電車は針綱とコマがあるから、電車は車掌が機械を早くまはすから、汽車は笛をならべながら早いで、ふ機の罪氣の無い答へがあるかと思ふと、知らん、「なんでがて」といふ様なのは澤山ある「海」といふ間には女房は波と、こんぶ沙水一ぱいほづきと觸、男の兒は、澤山は築港で車掌と蒸汽船がある、折答へてある、中には海は潮があつて觸と娘がありまつてと答へたのもある、葉で蝶や舟の形にして貼つたのも面白く好きで玩具の持ち寄りでは人形と汽車と電車が多い階上の同本室には同校裁縫生の手になつた生花、盆石の陳列、茶室

には女生徒のお手綱があつた。

### ●貯金の心掛

金森通倫氏が九州邊で貯金演説をした時に三度のものは二度喰べるやうにして勧らげと云つたとてそんな馬鹿氣だとかあるものか我々は三度のものを四度にもして大に儲しく積りだと非常に反対があつたさうです、其様まで云ふては素より餘り極端に過ぎるに相違ありませんが經濟の原則として貯金は是非とも收入の内から取出すの外はありません世間並とか附合ひ上とが云ふは奥さん方の口實になつて居りますが世間並みとも別に儲つた並みがあるでなく附合ひとて何でも貯めただけの事なせなければならぬものと極つたもので、もとよりませんれば此種な事を云ふ奥さん方は世間並以上の衣食、身分以上の附合ひ及び不取締から生ずる無駄遣いか澤山ある其事で會計が苦しいのです、第一に自分の家の収入を考へて見て衣食住は申すに及ばず交際費でも此以上は出せぬと思へば其れで何とが始末を附けるやうにせなくてはならぬ、乃ち凡ての事を一段多く少し控へ目にさへしてそして無駄遣に充分氣な附くれば餘程會計は樂に往けるのです、其様申すと奥さん方には悪いやうですか内にのみ居る人はお金を取り方の苦心に就では比較的同情がない爲め彼の着物と此の化粧品もと云ふ懲も出るので、すが御主人の氣になつて御覽になると今日の生存競争は中々大した骨折なんですかから少しでも貯金をして不時の準備做は是非とも奥さんの手でなさるやうな心懸けが肝要だと思ひます